聞き取り 回想録

第10代会長
宮城清次郎氏

第６代会長
(故)西原栄正氏

（1986年浦添市史聞き取り収録記録から）

はじめに

戦後、浦添のスポーツ界を一新した先輩方を訪ね、聞き取り収録からエピソードやハプニングなどを中心に回想してみた。

陸上競技を軸に、発展した本市スポーツは選手諸君の努力は勿論であるが、裏方として支えてくれた方々の良き運営も忘れてはならない。

戦後、第一回目の村内各字対抗陸上競技大会は昭和22年11月、浦添小学校の裏の窪地を青年団が整地して開催された。体力不足、練習不足で思うような記録が出ないまま閉会した。

しかし、コザ地区大会では総合二位を獲得することができ自信と成った。勝者の喜びと負けた悔しさで一段と練習に拍車がかかり、第二回目大会からは、応援団が繰り出し、鐘、太鼓の鳴り物入りで、優勝する選手を讃え、カチャーシーまで飛び出し、競技の合間も退屈をしない華やかな大会でもあった。

また、村代表の選抜された選手団を応援するため、地区大会や全島大会の名護競技場まで多くの村民が出かけた。

全ての村民が優秀選手の名前を憶えると同時に、その走法や癖まで真似るほど関心が高かった。競技にはエピソードやハプニングは付き物である。以下各先輩方の苦労話など含め回想してみた。

❍想い出の村内対抗陸上競技大会

第二回村内対抗陸上競技大会は、移転間もない頃の仲西小学校（現在の敷地）の校庭で開催された。陸上大会の季節は特に台風が多い時期である。その当日も、朝から強風であったが、とにかく開催した。

一周二百米のグラウンドのため、五千米は浦添小学校正門まで、一万米は首里までの往復だった。一万米の選手を出発させたのは良いが雨風が強くなり、茅葺き校舎は大きく揺れ始めた、観衆はそれぞれに帰宅した。役員の中にも自分の役目を忘れて家へ帰ってしまったのもいて、ゴールした選手で自分が何位かも知らされず、笑えない大会になってしまった。

また、翌年の一万米の選手が堂々と校門を出たのは良いが、なかなかゴールしない、心配した区民が探したところ、途中で棄権し観衆の後ろでアイスケーキを売っていたという選手もいた。外にも近道をして早くゴールした選手などもいたという。

各字対抗が盛んになるに連れ、各字では選手を激励するために栄養会がもたれた。

米軍払い下げのジャム、乾燥リンゴ、キャベツ、ポテト（米軍用）など、後にはトーフウブシーやビタミン剤、卵、ヒージャー汁まで多彩、代表選手の練習が終わる頃に、婦人会や女子青年が運動場まで食事を運び栄養を付けた。

また、城間では鶏を放し飼いを禁止する「法度の日」があり、部落を廻って、鶏を捕まえ、

主が罰金を支払う事になり、その金で運動会時の選手栄養会に使った。

（注）城間の頃以下 宮城政睦氏

初代理事長

(故)玉城幸男氏

（1986年浦添市史聞き取り収録記録から）

❍逸話あれこれ

競技運営が毎年遅れ気味だったので暗くなるまで大会が行われていた。円盤投げや棒高跳びなど危険なため、時には車のライトを照らしながら競技したこともあった。

ある時、最後の年令別リレーで選手が転んでバトンを落とした。バトンを探す間、次々と転び重なり、それぞれ近くにあったバトンを取り最後まで走ったが、バトンを受け取ったときと違っていたため、下位チームが申し立てをしたが暗かったのを理由に受けいれられなかった事もある。

浦添小学校での大会で審判に槍が刺さるハプニングが起こった。あの頃は竹の槍を使用していたために肩にささったものの、深くには到らなかった。責任者の一人として気をもんだものだ。

幾多の名選手を指導して来たが、皆良く練習に耐えてくれた。夕方、運動場には常に40～50人程度の練習生がいて、お互いに良く切磋琢磨した物である。このような雰囲気は上を目指す者に取って大いに刺激になるため、那覇や宜野湾からも選手が駆けつけ、仲良く練習してくれた。何事も雰囲気作りが大切だ。

❍村内一周駅伝、総合バレー、総合バスケットの狙い。

中学生以上、青年会を中心に上記の大会は早々と取り入れられた。中学生以上としたのは、各部落において先輩、後輩とのスポーツをとおしての交流を深め、青少年の健全育成が狙い。大きな部落は二チームでも良し、小さい部落は二カ所で、一チーム。合併しても良いと言うルールで多くのチームが編成され、大賑わいの大会だった。また、職域バレーでは農協、学校職員、会社、警察などが出場した。

スタート直後の若き玉城氏の前傾スナップ

高跳びの練習に励む玉城氏

第８代会長

佐川　正二氏

（1986年浦添市史聞き取り収録記録から）

❍手作りスパイク

昭和22年の地区大会（野嵩）で私は百米の浦添代表で出場した。雨降りでグラウンドの状況も悪く、相手はスパイクを使用していたせいもあって二位となった。悔しい思いをした。早速、安波茶の宮城正一先生が軍のラグビーボールを貰ってきて、２人で首里まで行き、スパイクを

作らせた。スパイクの歯は鍛冶屋に行って作らせた。次の大会からは優勝できた。浦添でスパイクを最初に使用したのは私なんです。

❍仲西小学校のグラウンド整地

仲西小学校のグラウンドは東側と西側ではかなり段差があった。百米競争ではタイムが違うので整地をさせた。東側から土を取って西側に埋めて同じ高さにしようという考えだが、測量技師に見せたら「こんな広い運動場なので、どうしても傾斜をつけないと水がたまる」と言う訳ですよ。グラウンドを平坦にするために整地するのに、こんな馬鹿な話があるかと校長に言ったら「いや、専門家がそう言うのだから仕方ない」と相手にされずじまい。今でも坂でしょう。

(故) 西原 正次氏

(1986年浦添市史聞き取り収録記録から)

❍戦後、初回の競技大会を開催

私が引き上げて来たのが、昭和21年10月で城間の青年会長の又吉重雄さんより会長を引き継いだ。

各字の青年会長が集まったとき、私が一番年上だったので、初代の青年会長（村の）になった。その後、副会長に西原栄正先生になってもらった。運動の得意な佐川正二さんや仲座方信さんなどが復員してきたので、いつもビリだった競技大会をやろうと青年会中心で初回の競技会を開催した。

第９代会長

富本　祐憲氏

(1986年浦添市史聞き取り収録記録から)

❍何でも出来るスポーツマンに憧れ！

現在はスポーツの種目が増え、選手も専門化しているが、我々の時代は何でもやっていた。陸上競技の時期になると走るだけでなく、全ての種目に挑戦し、バレーの大会が近づくと、その練習に励み出場、バスケットの時はその練習をやる。スポーツマンというのは、何でも出来る人をいった。そういう人達が活躍する姿を見ると憧れが強く、次々に若い人達がスポーツに興ずる。それで浦添は強くなった。

バレーボールの大会は運動場でネットを10張りぐらい張って開催した。風の強い大会などは風上になるとスパイク面で有利、だがサーブ面になるとほとんど入らない。

風下の方からサーブすると、そうとうのドライブがかかる。実力プラスアルファーが試合を左右したものだ。また、雨降りの時は雑巾をたくさん持っていき、泥んこの中に転がって行くと、雑巾で拭きながらプレーした。強いサーバーが出てくると断然有利になることになる。

あの頃は試合以前の苦労が多かったが、今は体育館を利用してやれるから益々楽しいでしょう。